

中級フランス語の講読の授業 - 作家の日記

Journaux intimes d'écrivains : cours de lecture pour les apprenants de français de niveau intermédiaire

近江屋志穂 OMIYA Shiho

Résumé

Nous avons travaillé, pour ce projet, sur la didactique de la lecture de journaux intimes d'écrivains, didactique adaptée aux étudiants japonais qui apprennent le français comme deuxième langue étrangère. Si nous avons choisi le journal intime comme support, c'est qu'il est composé de courts fragments qui ne risquent pas de décourager les apprenants. En plus, c'est un genre auquel les Japonais sont habitués. Nous avons fait lire à nos étudiants, douze fragments du Journal du dehors et de La vie extérieure d'Annie Ernaux, et leur avons demandé d'écrire, en français, l'extrait complet d'une de leurs journées de vacances. Ces textes les ont sensibilisés à une des problématiques du genre, la distinction entre le journal du « dehors » et celui du « dedans ». Ils leur ont également permis d'entrevoir certains aspects de la société française. Enfin, nos étudiants ont appris à lire des textes dont le vocabulaire et la structure grammaticale sont malgré les apparences, assez difficiles. Leur réaction, leurs copies et l'enquête menée à la fin de la séance, ont prouvé l'intérêt d'utiliser le journal intime en cours de français.

Mots clefs

lecture, journal intime, culture

1. はじめに

日本の大学におけるフランス語教育では、一般に、文法の学習後、講読が行われている。しかし90年代以降、とりわけ第二外国語の講読の授業は、実用に役立たない、生きた文化が学べないという理由で批判を浴びている。なかでも文学作品は敬遠される傾向にある。だが、読み、書き、聞き、話すという外

国語能力の一つをなす読解をないがしろにして良いことはない。もちろん少ない授業時間内でテキストの訳読という伝統的なやり方に終始しては、学習効果が限られてしまう。そこで、日本のフランス語教育関連の学会においても、訳読以外の要素を組み込んだ多くの試みが提案されている¹。フランス語教授法がより盛んなフランスにおいても、読解の教授法は様々に論じられている²。現在内外で見られるものは、*Lector in fabula* (1979)でUmberto Ecoが言うように、読書が受動的な行為ではなく、テキストをめぐる様々な要素を手がかりに、積極的に意味を構築していく行為であるという考えに基づいていると思われる。テキストをめぐる要素とは、テキストの背景や作者についての知識、テキストの序論や結論などの「パラテキスト」等である³。母国語では、こうした要素を無意識に動員して効率の良い読解を行おうとするのだが、外国語テキストを読むときは、文法事項の確認や単語の意味調べにエネルギーを費やしてしまう。そこで、外国語の授業では、学習者に読解を助けるための予備知識を与え、母国語における現実の積極的な読解行為に近づけるような方法を考えるのである。こうした中で、CICUREL (1991) は、「学習者の母国語における読書経験や知識に基づいたペダゴジー」を提案する⁴。我々の授業では、その一步として、日本人学習者に馴染みが深いジャンルである、日記をテキストに取り上げる。

我々が対象とする学習者は、埼玉大学教養学部フランス語 の学生である。この授業を受講するには、1, 2年のうちにフランス語の授業を最低週3コマ以上、平均で4コマ、つまり180時間以上履修していなければならない⁵。2004年度の受講者数は5名であり、フランス語を専門とせず、共通に受けたフランス

¹ 読解の教材も、映画のシナリオをもとに口頭練習も組み込んだもの、フランス本国だけではなくフランス語圏の歴史・社会も視野に入れたものなど、新しい視点で考案されたものが多く出版されている。

² 例えばCICUREL(1991)は様々な種類のテキストを対象に、GRUCA(1993)は主に文学作品を対象に研究している。

³ Eco (1979)は、読者の予備知識の総体をencyclopédieと称した。

⁴ CICUREL (1991)やMOIRAND (1979)は、学習者の母国語の経験が外国語テキストの読解を左右すると主張するが、具体的な教授法は示していない。

⁵ 1年次には、文法、文化事情、会話、表現の中から、文法を含む授業を4単位2コマ以上、2年次には、フランス語、会話、表現の中から2単位1コマ以上受講していることが要件。合計8単位で外国語の科目として卒業単位に認定される。フランス語は2単位であるので、フランス語、を合わせて8単位とする学生もいるが、1, 2年で8単位4コマの卒業要件を満たした上でフランス語を受講する学生もいる。授業のレベルはが一番上である。

語の授業は1年次の文法のみという、学習歴が様々な学生たちである⁶。フランス語のレベルは実用フランス語検定2級前後である⁷。

2004年度のフランス語 が目的としたのは、テキストの読解を通して、フランス語力を向上させ、フランスの文化に親しませることである⁸。本論では、具体的な研究と実践に基づき、文法の学習を一通り終えた後の講読の授業についてあらためて考える⁹。以下に、講読テキストとして日記を用いる具体的利点、教材の研究、授業の構成、授業の実際、今後の提案という順で、我々の試みについて述べ、一つの読解の教授法を示したい。

2. 日記を用いる具体的利点

2.1 何故日記か

日記は、一般に講読のテキストとしてフランス語の授業であまり用いられない。それは、一つには、日記が文学史の中で二次的な地位しか与えられないためであろう。現代の批評家たちの日記批判に見られるように、そもそも日記は文学ではないと見なされることがある。だが、20世紀前半のフランスの文学史をひも解くと、ジュール・ルナールやアンドレ・ジードの日記が、彼らの他の作品と同じくらいの重要性をもつことが分かる。一方、作家の内面や、作家個人の観点から社会が記述された日記は、ある集団の心象や歴史的な事実が「客観的」に書かれたテキストよりも、document authentiqueとして資料的価値が低いとされるのかもしれない。だが、日記テキストの特徴を検討すると、語学の講読テキストとして、多くの効果が期待できると思われる。すなわち、日記に用いられる語彙や表現は豊かであり、文体は多様である。日常生活の逸話、他人の観察などを通して、叙述、描写をはじめとするあらゆる語りの様式が読み取られる。また、暗喩、換喩、同音異議、類音重語などのレトリックが見出される。そして一人の作家が記録する日常生活は、新聞や雑誌などの資料と同じようにひとつの国の文化を映し出す。そこには社会の出来事の記述とそれに対するコメントが見られるからだ。また、いくつかの現代日記に目を通すと、

⁶ 経済学部1名、教養学部3名（近代芸術、景観、フランス文学に関心をもつ）、ヨーロッパ近世美術史専攻の大学院生1名であった。

⁷ 自分の専門分野でも必修でもないフランス語 を履修するほどの学生は、モチベーションがかなり高いということであり、大学院進学や留学を目指して勉強している者もいる。

⁸ 本授業に入る前に、註や解説つきの教材からいくつかのテキストを選んで講読を行った。また、映画を見せ、部分的にその聞き取り練習を行った。

⁹ ここでは初修外国語としてフランス語を学んで2年目以上、初級文法を既に学び、辞書があればフランス語の文章を読むことができる学習者を中級と考えた。

交わした会話や手紙，読後感想，芸術批評，回想，思索，告白，格言的言説なども記述されている．さらに，作家は日記の中でしばしば同時代の他の作家や作品，あるいは自らの作品に言及しており，一般的な文学史とは捉え方の異なる文学の歴史を教えてくれる¹⁰．

2.2 一話完結のテキスト

このような事柄を学ぶのに，学習者は多くの頁を読む必要がない．教師は学習者に，日記の数日分を課題として与えれば十分である．そこに上で示したような様々な要素が含まれているからだ．そして，日記は断章形式であり，一つ一つのテキストが短い．そのメリットは，MOIRAND (1979) の言う「完全な読解」を行うのに，「長期の記憶力」に頼らなくてよい点である．完全な読解を可能にするのは，テキストを順に読み進める過程で，要所に目を止めながら全体を把握する能力，および先を予測したり意味を推測したり，情報を蓄えたりする能力であるという．読者はこうした能力を動員することによって意味を理解するが，それには「長期の記憶力」が必要であり，テキストが長ければ長いほど，その負担は重くなるという．MOIRANDによると，外国語で書かれたテキストの場合，言語的困難が意味理解の過程を遅らせ，長期の記憶力に頼る読解は一層効率が悪くなる．その点，テキストが短ければ，学習者はより早く全体の意味を把握することができ，語彙や文法などテキストの語学上の問題解決に集中することができる．端的に言って取り組みやすく，学習者のモチベーションを持続させることができる．しかも，日記の一つの断章は，例え一冊の日記全体の一部に過ぎないにしても，学習者はある完結したテキストを読み通したという自信を持つことができるのである．

2.3 学習者の母国語の経験に基づいた教育法へ

さらに，日記が日本人学習者にとって取り組みやすい理由として，日本人に馴染みの深いジャンルであるということが挙げられる．日本の日記文学の伝統は，王朝女流文学にまで遡る．そして近代を経て今日まで，作家の日記は数多く出版されており，誰も一度は読んだことがあるであろう．また，明治以来現在まで続いている学校教育方針の影響により，日本人は日記を書く習慣が身につけている．さらに，日本とフランスの日記には，形式上及び内容上の共通点も見られる．従って，日本人学習者は，フランス語で書かれた日記にも比較

¹⁰ 尚，テキストの文学性を前面に出した授業構成にはしない．とは言え，次の教材研究で見ると，テキストは文学としての特性をもつ作家の日記である．親しみやすい日記という形式であるため，学習者は文学作品を読むと意気込むは必要ないが，テキストを理解する上で必要な文学事項の説明は受ける．

の容易に取り組むことができると思われるのである。

3. 教材研究

我々が取り上げたのは、アニー・エルノーの *Journal du dehors* (1993) と *La vie extérieure* (2000) である¹¹。日記の一つの断章には、一般に一日の雑多な出来事をはじめとする様々な事柄が混在している。それに対して、エルノーの日記は、多くの場合、それぞれの断章において一つのテーマしか展開されない。また、その語り口は常に簡潔である。*Journal du dehors*において自らの文体を「写真的」と形容しており、一瞬の光景をまるで写真に写すかのように記述するというのが意図された文体である。このまさに、短いテキスト、簡潔な文体、一話完結、という点が、我々の学習者に適しているのである。

ここではテキストの特徴を論じながら、学習者が学ぶべき事柄について具体的に検討する。

3.1 文化の学習

この日記の最大の特色は、執筆の観点にある。エルノーは *Journal du dehors*の序文において、日記に「外の世界」あるいは「外部」を記述する、と宣言する。その意味するところは、日常生活の様々な場で展開される風景を記すということである。彼女は地下鉄や郵便局、スーパーマーケット、デパート、病院の待合室、美容院などで出会った人々の動作を観察し、会話を聞き、それを記述する。あるいは新聞記事、壁の落書き、テレビやラジオ放送の一部などを書き写す。そうすることで、「ひとつの時代の真実」に到達することを目指した。この作品の序文に、そうした意図が明確に示されている。

社会の欲望、フラストレーションや不平等が読み取れるのは、人々がレジでどのような視線を自分のかごの中味に向けるのか、どのような言葉でステーキを注文したり絵画を評価したりするのかということにおいてである。客に侮辱されるレジ係、人々が避けて歩く物乞いたち、社会の暴力と恥の中に。あまりにも見慣れて日常の光景となっているために無意味で取るに足らないと見なされる事柄の中に。

¹¹ 日記とエッセイなど他ジャンルとの境界は曖昧である。日記と日記形式によるフィクションとの違いを研究した RAOUL (1999) によると、読者が日記かそうでないかを判断するのは、パラテキストからである。それに準じて、我々の研究においては、作者本人が序文などでその作品が日記ではないと宣言しない限り、断章形式で「日記」というタイトルをもつテキストを日記と見なす。

学習者は、こうした観点から捉えられたフランスの日常生活に触れることができるであろう。

一方、エルノーは、フランスの社会問題や政治状況、重大事件、国外の時事なども記述している。我々の学習者にとって重要なのは、全体的に社会の底辺に生きる人々に注目した断章が非常に多いということである。役所でフランス国籍の取得を容易に許可されない外国人労働者、地下鉄や街中でお金を要求する人々、栄養失調のまま放置される貧困家庭の子供の様子などがしばしば書かれている。その一方で、自分と同じ社会環境にある人々への言及が少ない。学習者にとって興味深いのは、この日記が、古い歴史の生んだ諸芸術、モードの最先端、豊かな食文化といった華やかなイメージと対極にある、だが現実のフランス社会の姿を映し出しているという点である。

3.2 文学作品としての関心

エルノーは、外部を記述すると宣言する一方で、自分自身のことは日記から可能な限り排除することを試みたという。つまり私生活や内面ではなく、「名前も知らない人々がただ生きることによって織りなされる物語」を書こうとした。だが、最終的に彼女は、当初考えていた以上に自分が日記に入り込んだことを認め、「外部」の生活を記述することによって、実は自分自身のことを書いていたということに気づく。*Journal du dehors*の最後の断章で、作者は見知らぬ他人を観察しながら、過去の一時期の自分を思い起こす。RERの中で、近くの若い男を見ては、バカロレアの年に交際していたDという男性を思い出し、小さな子供を膝に乗せている女性を見ては、自分の息子がその子のように「世界を発見」していた時期を思い出す。つまり、現実の生活において、作者には、行き会う無名の人々の中に、これまでの人生が蓄積されているように思われる。その一方で、自分も同様に他人の人生の一部を担っていると思えてくる。作者の実生活においては自己と他者とが交じり合う。そしてエクリチュールにおいては、「内部」と「外部」とが限りなく融合に向かう。つまり、作者は、はじめに区別していた「内部の記述」と「外部の記述」との間を行き来する¹²。学習者にも、こうした問題を問いかけてみる。

¹² フランスの現代日記の問題の一つをなす。すなわち他人や外の世界について語られた日記は *journal externe* あるいは *journal du dehors*、作者の私生活や内面について語られた日記は *journal interne* あるいは *journal du dedans* と分類される傾向がある。フランスの多くの現代作家は、これらを対置させ、そのいずれの立場を取るのかという選択を自らに課しているようにさえ思われる。

3.3 フランス語の学習

また、学習者が理解すべきことは、断章の構成である。多くの場合、初めに断章のテーマが示され、観察、結論が続く。結論とは、しばしば対置によって示される分析やコメントである。エルノーは、出来事や事件について批判や風刺を行ったり、未来の状況を予想したりする。また、人々の会話を聞いたり行動を観察したりしながら、普遍的な人間の性質や格言を引き出す。

フランス語としては、断章の文章は短く、時制は主に現在形が使用されているため、全体の把握は一見容易だが、次のような事柄を理解しなければならない。まず、日記に特有の名詞文である。しばしば断章の冒頭で名詞文がテーマを予告する一方、結論や状況を表すこともある。また、この日記には、文章語と日常語の両方が使用されている。会話文も多い。フランス語においては日本語と同様、改まった場面や書き言葉で用いられる言葉、会話や砕けた文章で用いられるもの、その他俗語など、様々な言葉の用法がある。そうした言葉が混ざった自然なフランス語の文章に慣れることが求められる。

4. 授業の構成

授業では、上記のテキストから12の断章を扱った。それは、日仏両国に共通して見られるような日常の風景が描かれたもの、フランスの社会独特の様相を垣間見させるもの、エルノーの日記として特徴的なものである。テキストが document authentique であることから、難易度をよく検討した上で選択した。授業では、フランス語の構文、内容の面で容易なものから始め、少しずつ難度を上げていった。

第一回目の前の授業でテキストを配り、テキストについての予備知識として、日記というジャンルの一般的特徴、及びエルノーの日記の特徴を説明した。作者の執筆の観点については、3で引用した *Journal du dehors* の序論を読んで解説した。この日記の難しさは、フランス語そのものの難しさの他、文化的背景や多少の文学の知識を必要とすることにあり、その補足を充分に行うよう留意した。それぞれの断章について、文化、文学、フランス語、読解のポイント、という項目に従って、重点的に解説すべき事柄を事前に整理しておいた。以下に、テーマとともにそれを示す。番号は扱った順にふってある。

RERの中で雑誌を読みふける中年女性の観察 (ERNAUX, 2000, p. 16)

文化、語彙：Denfert-Rochereau 駅, RER, cartable

読解のポイント：ユーモアの理解

バーゲンに出かけた作者の心境 (ERNAUX, 1993, p. 32)

フランス語：代名詞の内容 / 名詞の同格 / 会話の言葉 (fringues)

無料広告紙の悩み事相談案内記事の分析 (ERNAUX, 1993, p. 30)

文学：小説の「一人称」, 「三人称」の語りについて / 広告の記事の「文学的」分析

フランス語：同格, 名詞文

病院で治療を受ける作者を前に, 看護師たちがおしゃべりに興じている様子 (ERNAUX, 2000 : pp. 128-129)

文化：フランスの従業員や店員の客への態度

フランス語：名詞文, 語彙 (combiné, cabinet), 会話調

デパートのスピーカーから流れる宣伝文句の分析 (ERNAUX, 1993, p. 58)

フランス語：名詞文 / 語彙 (haut-parleur)

カフェ・フロールで若い女を誘惑する中年男性 (ERNAUX, 2000, pp. 55-56)

文化：Flore, Sartre, フランスのカフェ文化の歴史

フランス語：同格の protecteur, toujours の意味 / 語彙 (branchée)

読解のポイント：筆者の皮肉から生じるユーモア

郊外に住む母親を息子が訪ねたある日曜日 (ERNAUX, 2000, p. 98)

文学：視点の移動

フランス語：代名詞の指す内容, 名詞文

1995年夏に起きたRERサン＝ミシェル駅の爆弾事件 (ERNAUX, 2000, p. 67)

文化, 社会：事件の背景

フランス語：対置の構造, 名詞文

「アラブ人が多すぎる」というアンケート調査結果 (ERNAUX, 2000, p. 134)

文化, 歴史：第二次世界大戦中のヨーロッパにおけるユダヤ人虐殺の歴史, そして現代フランスにおける, 不法滞在のアラブ人などいわゆる移民問題

フランス語：対置の構造

コソボ難民の問題と, 国内の失業問題 (ERNAUX, 2000, pp. 140-141)

文化：フランスの失業問題

文学：劇作家 Jean Anouilh

フランス語：対置の構造 / 語彙 (feux, fichus)

メトロの中で乗客にお金を要求するホームレス (ERNAUX, 2000, p. 76)

文化：失業問題, SDF

フランス語：俗語 (conneries, cul, crever)

RERの中で過去の一時期の自分を想起する (ERNAUX, 1993, p. 106)

文化：バカロレア，フランスのエリート社会の仕組み

文学：「外部記述」の総まとめ

フランス語：名詞文

授業は，和訳と，こうした事柄の解説を中心とした．第六回目に，「外部記述」の総括と見なすことができる，*Journal du dehors*の最後の断章 を読み，一般の日記とは異なるエルノーの日記の特徴を再度確認した．

課題としては，予習の他に，二種類のテキストの日本語訳(テキスト ，)，さらに夏休みをはさんでA4一枚分のフランス語の日記を課した．フランス語の日記については，その形式について特に指定しなかった．

5. 授業の実際

それでは，いくつかの断章を例に取り，実際の授業での学習者の反応や取り組み，及びこちらから与えた解説を具体的に示そう．我々の掲げた目標の達成度については，アンケートをもとに検討する．

5.1 和訳

テキスト (日付なし)

Journaux d'annonces gratuits chaque semaine dans la boîte aux lettres.
« PROFESSEUR SOLO-DRAME. LE GRAND MARABOUT est enfin parmi nous. Il se propose de résoudre tous vos problèmes : amour, affection retrouvée, fidélité entre époux, désenvoûtement, concours, succès aux sports, retour immédiat au foyer de la personne que vous aimez. Si vous voulez être heureux passez sans tarder me consulter. Travail sérieux, efficace. Résultat garanti. 131ter, av. de Clichy. 2^e étage porte droite. » (Photo d'un bel Africain dans l'encadré.) En quelques lignes, un tableau des désirs de la société, une narration à la troisième personne, puis à la première, un personnage à l'identité ambiguë, savant ou magicien, au nom poétique et théâtral, deux registres d'écriture, le psychologique et le technico-commercial. Un échantillon de fiction.

学習者の中には，これが広告紙の記事であることがすぐに分からなかった者がいた．また，En quelques lignes以下の名詞文による記事の分析の内容があまり理解されていなかった．すなわちこの記事は，初め« LE GRAND MARABOUT », « Il »を主語とした「三人称による語り」，次いで« passez sans tarder »と「一人称による語り」で書かれ，その人物の名前は「詩的」あるいは「演劇的」な響き

をもち、「心理学的」かつ「商業的營業的」エクリチュールが用いられている。ここでは、語りの様式を簡単に説明した。そしてこの断章の面白さは、本来まじめな「文学的分析」の対象とはならないテキストをわざわざ書き写し、「フィクションの見本」として「適切」に分析するというずれにある。広告紙の内容だけでなく、こうした知的な「遊び」も理解するよう解説した。

テキスト (14 avril)

Sous la neige qui tombait, un homme demandait à manger, aux feux du grand croisement sur la nationale.

Vingtième jour de guerre. Les colis affluent pour les déportés kosovars et des milliers de gens offrent d'accueillir chez eux une famille. L'exode des Kosovars frappe l'imaginaire : brutal, collectif, imputable à une cause unique, Milosevic. C'est un malheur dans lequel les victimes n'ont aucune part de responsabilité, ni aucun recours. Une tragédie à l'état pur. (Anouilh disait qu'avec elle, on est tranquille.) Et les femmes portent des fichus et des jupes longues comme nos paysannes d'autrefois.

Les sans-papiers et les sans-logis, les chômeurs ne suscitent qu'indifférence. C'est du malheur lent, isolé, aux raisons multiples, qui ne fait pas spectacle. Dont on doute que les victimes n'y soient pour rien (tout de même, il y a des foyers pour dormir, du travail quand on cherche bien, etc.). Ce malheur-là réclame autre chose que des colis.

まず、最初の一文では、信号待ちをしている車の窓ガラス越しにお金を要求する男の様子が書かれているが、フランスの大通りでしばしば目にするその光景を見たことがないためか、feuxを「焚き火」と訳した者がいた。もちろん sans-papierという言葉にも馴染みがない。また、Anouilhとは20世紀の劇作家 Jean Anouilhを指し、その前後に演劇をめぐる語彙がちりばめられていることが理解されていなかった。すなわちコソボ人たちの不幸は、「spectacle」として人々の目をひく。それはアヌイユの言う「純粋な悲劇」であるからである。さらに「フランスのかつての農婦のように、頭巾をつけ、長いスカートををはいている」というコソボ人女性たちの様子は、「演劇性」を一層強調する。こうした点を解説した。

テキスト (13 décembre)

Le wagon du métro est plein. Une voix de femme s'élève, puissante. « Soyez un peu humain ! » Un silence absolu se fait. Une voix terrible, qui raconte son malheur, accuse l'égoïsme des gens, leur cul bien au chaud, etc. Personne ne la regarde ni ne répond à sa colère, parce qu'elle dit la vérité. Descendue sur le quai, elle se heurte aux gens qui portent des sacs de cadeaux pour Noël, elle les invective, « vous feriez mieux de donner de l'argent aux malheureux plutôt que d'acheter toutes ces conneries ». Encore la vérité. Mais on ne donne pas pour faire le bien, on donne pour être aimé. Donner à un SDF juste pour l'empêcher de crever tout à fait est une idée insupportable et il ne nous aimera pas pour autant.

これは、訳の提出を課したテキストの一つである。平均的と思われる学生の答案の一部を示そう。

メトロの中は人でいっぱいだった。一人の女の力強い声が響き渡っていた。「少しは人間らしくなって下さい。」著しい沈黙が生じた。そのすさまじい声は彼女の不幸を語り、人間のエゴイズムや彼らの激しいばかさ加減などを非難するものだった。[...]そして彼女は彼らにこうののした。「あなた方はこんなばかげたものを買うよりもむしろ不幸な人たちにお金を与えた方がいいですよ。」これもまた真実である。しかし我々はよいことをするため与えず、愛されるために与えるのだ。ホームレスの人たちにただ全く死んでしまわないようにするため寄付するということは、耐えがたい考え方であり、ホームレスはだからといって我々に好意を持つことはないだろう。(中略記号執筆)

下線部は、誤訳、あるいはニュアンスが分かっていないと思われる箇所、修正した箇所である。その他の回答については、ほとんど間違いのないものから誤訳だらけのものまで見られたが、重大な誤訳を正して説明すれば十分理解されるテキストであると考えられる。

共通して訳せていなかった箇所は、「Une voix terrible, qui raconte son malheur, accuse l'égoïsme des gens, leur cul bien au chaud, etc.」である。ここは「彼らのお尻は熱くなっていた」、「彼らの性的興奮などを非難している」といった訳が多い。「cul」という俗語の意味が分かったとしても、前者のような直訳から、「自分たちばかり安楽に暮らしている」と言ってこの女性が自分の惨

めさに対する怒りを他人にぶつけているという点を、誰も読み取ることができなかった。後者の訳を書いた者は、作者が痴漢に怒っていると思ったようであり、日本の満員電車の状況を念頭に置いている。ここで書かれているのは、地下鉄の車両内で自分の悲惨な境遇について「演説」した後、乗客の側を通過して小銭を要求する失業者の様子である。ごく日常的に見られる光景だが、それを見たことがない者は、状況を全く想像できない。その上、フランスの失業問題は学習者にあまり知られていない。従ってその点を補足した。

5.2 フランス語の日記

提出されたフランス語の日記の大部分は、「私」を語り手とし、その日の出来事や感想を記した日記であった。それぞれのフランス語力に応じて、のびのびと日常を綴っているという感想を持った。今回は、考えていることをできるだけ自由に表現するようにという指示しか出していない。従って、大まかな点についてのみ返却時に注意を与え、残りの間違いを添削しておいた。ここでも平均的な答案としてある学生の日記の一部を紹介する。

En vacances, ma sœur est venue à Tokyo avec son mari et son enfante, qui est deux années et se nomme Yuri. Yuri est très petite, ne peut pas encore prononcer bien, elle s'appelle donc « Uri », aussi nous l'appelons « Uri ».

Dans le centre commercial de Ikebukuro, nous sommes assis sur le banc, donc nous étions fatigués de marcher. Ma sœur a pris des gâteaux dans le sac et les a donnés à son enfante. Yuri les a mangés, avait l'air content.

Tout à coup son père a dit : « Ne mange pas les gâteaux aussi tant ! ». Il l'a privée des gâteaux. Yuri a essayé de les récupérer, mais ne peut pas. Elle a dit : « con ! con ! » Le père a fait un geste de la taper.[...]

Après tout ma sœur s'a entremise entre son enfante et son mari. Ils se sont réconciliés, et sont allés au aquarium. Yuri a appelé son père « papa ! », et son père l'a appelé « Uri ! ». (中略記号は執筆者)

この学生には、語彙については、conは書き言葉では使用しないこと、(ここは méchant 程度がよいこと)、enfantは男女同形であること、文法については、代名動詞を複合過去にするときにはêtreを使うこと、などの注意を与えた。

5.3 アンケート

アンケートでは、次の3点を確認した。日記を講読テキストとして使用する利点はあったか。エルノーの日記テキストからフランスの文化を学ぶことがで

きたか。日本語の日記の読書経験，執筆経験は，フランス語の日記の読解に役立ったか。答えは「はい」，「いいえ」だけでなく，できるだけ詳しく記述するように求めた。具体的な質問内容は，次の通りである。エルノーの日記はどのような点が難しかったですか／日記は分量的に読解テキストとして取り組みやすいと思いますか。この日記から，どのような点でフランスの文化を学ぶことができたと思いますか，母国語による経験については，次のような質問をした。これまでどのような機会に日記を書きましたか／日記には何を書きますか／これまでエルノーのようなスタイルの日記を読んだことはありますか／日本あるいは外国のもので，日記と言えば誰のものを思い浮かべますか／これまでに日記を書いた，あるいは読んだ経験により，この日記は取り組みやすかったですか，あるいはそうした経験は読解に役立ちましたか。以下に回答を分析する。

講読テキストとしての日記については，2名が大変難しかったと答えた。その他，「日常生活が題材だったので，ポキャブラリーの面で読みやすかった」（1名）という回答があった。テキストの長さについては，全員が適当と答え，「あまり長いとあらすじを忘れてしまったり，集中力がもたなくなったりするのでこのくらいの長さがちょうどよい」（1名），という回答があった。フランスの文化ということでは，テキストからそれを学ぶことができた全員が回答した。そして次のような意見があった。「ヨーロッパのホームレスや失業問題については知識として知っていたが，フランスでもそれが深刻な問題であることが分かった。」「テキスト から，一人の人物の考え方を通じて，フランス国民の考え方を知ることができたような気がした。」「一般的に日本人は，フランス，特にパリと聞くと華やかなイメージを思い浮かべるが，実際は必ずしもそうではなく，日本よりもずいぶん素朴であると思った。」

母国語の日記読書経験，執筆経験が，エルノーの日記の読解に役立ったという意見はなかった。まず，全員が学校教育の中で日記を書かされた経験があったものの，現在も継続して書いているという者はほとんどいなかった。時々日記のような文章を書くとしても，その日あったことをメモする程度であり，自分の内面が中心になっていると答えている。学校教育の過程で，いわゆる外部の日記である種々の観察日記を書いた経験もあるはずだが，それを思い浮かべた者はいなかった。「そもそも日記ということをおそらくあまり考えずに読んだので，今までの経験を意識することはなかった」と答えた者がいた。日記を読んだ経験は全員あり，思い浮かべる日記としては，アンネ・フランクの日記や，おそらく中・高の授業で読んだのであろうが，紫式部日記，更級日記などの古典文学を挙げている。つまり，エルノーのような日記は読んだことがない。こう

したことから、日本語の経験が役立ったと思われなかったのであろう¹³。

フランス語として難しかった点については、次のような回答があった。「動詞のない文をあえて用いることによってもたらされる効果をつかむことができなかった。」「主語と動詞が倒置された文章は、どのようなときに用いられるのか疑問に思った。」「会話調の文章、俗語などが理解しにくかった。」「フランス独特の社会現象の背景を知らないために、理解しにくい箇所があった。」

5.4 学習の成果

エルノーの観察は、パリとその郊外に限られる。だが、一人のフランス人が、独自の切り口で捉えたフランスの社会は、フランスの文化の一樣相を示している。授業では、一つ一つの断章に含まれる文化的要素から、それを説明するきっかけが与えられた。さらに、このテキストは、社会問題について読者の関心を引き出したり、ユーモアの効いた読み物として読者を楽しませたりする。アンケートを見ても、難しいテキストではあったものの、学習者と同時代の現代のフランス社会が記述されていること、日常的な事柄がテーマとされていることから、学習者はそうしたフランスの文化に親しむことができたことが分かる。授業中も、フランスの社会や一般の人々の生活について、様々な質問を受けた。

また、「外部の視点」から匿名の人々の日常の場面を記述するという観点に興味を持った者は多い。授業中の反応として、この作家のような分析や結論を導くことは不可能だとしても、こういうスタイルの日記を書きたいという者があった。ただし、今回の授業では、テキストを文学として読むまでには至らなかった。

フランス語の面では、難しい部分をどのように理解しやすくするよう工夫するのが今後の課題となる。会話表現については、そのニュアンスを伝えるのが難しかった。また、名詞文の文体上の効果を分かりやすく説明することができなかった。だが、学習者にとって良い刺激になり、少しずつ難しい構文にも慣れていったという手ごたえをもった。この後に、短編小説の読解を行ったが、こちらの方が長いにもかかわらず、ずいぶん易しく思えたという感想があった。

さらに日記テキスト読解の延長線上で、学習者はフランス語の日記も書いた。フランス語の間違いはあるものの、何の指示をしなくとも、外国語でまとまった文章が書けるというのは、課題が日記だからこそであろう。

¹³ ただし、エッセイ、旅行記、小説など他ジャンルや映画の中で、エルノーの日記から受けたのと同じような印象を受けたことがあると答えた者があった。

6. 結論にかえて - 今後の授業構成

以上の通り、初修外国語としてフランス語を学ぶ学習者を対象として我々が試みた、エルノーの日記テキスト読解の授業について述べてきた。

授業においては、結局和訳が大きな部分を占めた。しかし、モチベーションの高い学習者は、文章を隅々まで理解したいという欲求をもっているものであり、このクラスでは訳読の必要性もあると思われた。もちろん、それだけに終始しないよう、文化的背景やエルノーの文章の特徴の解説にできるだけ時間を割き、フランス社会の様々な側面に対する関心を引き出すよう努めた。それにしても、5.1で示した解説のポイントをもっと生かし、テキストの特色に応じて読解の目的を指示することで、読解力をさらにのばすような工夫が必要であったと思う。そこで今回の反省をもとに、より効果的な授業に向けていくつかの提案をしたい。大まかには、次の点を念頭に置く。

- ・予習の前に、テキストの理解を助けるような情報を与える。キーワードとなるような難しい語彙、テキストの背景の説明である。場合によっては、設問を用意し、その場でざっと目を通しながら答えさせるようにし、テキストのだいたいの内容を把握させておく。また、ユーモアなど読解のポイントを読み取るよう伝えておく。

- ・予習の際、意味調べに終わらないよう、テキストによって読解の目的を与える。つまり精読させるもの、だいたいの内容を把握させるもの（内容理解が容易なテキスト、長めのテキスト など）、あるいは構成を書き出させるもの（、）、というふうに分ける。名詞文については、完全な文章に直すよう指示する。これは作文の練習にもなる。

- ・テキストの理解を深めるため、読解後に、テキストの内容に関して何らかの作業を行う。例えば日本との比較をさせる（、）、失業問題など、フランスの社会について調べさせる（テキスト、、）などである。

こうした点に留意し、上に引用したテキスト、について、授業構成のために補うべき事柄を考えてみた。

テキスト：予習の前に、学習者に最初の一文に注目させ、それが断章のテーマであることを伝える。「郵便受けに配布される週刊無料広告紙」がどういうものであるかを確認する。その後断章の構成について設問形式で確認させる。まずざっと目を通させ、次のような設問に答えさせる。どこからどこまでが記事の文章の書き写しか。（引用符内の文章）Il se propose de から始まる第三文の内容については、どういうことが並べられているか。（人々のあり得る

悩み事) 要するに何の広告であると思うか。それが分かったところで、どのような単語が並べられているのかを予測させる。「社会の欲望の一覧」の内容は、文中のどの部分に書かれているか。この広告を出した人物「偉大なる聖者」についての情報はどの部分か。(「*« Si vous voulez être heureux »*から「*porte droite*」まで)。

授業では、意味を確認した後、名詞文を完全な文に直してみる。(例えば第一文は、「*« J'ai trouvé des journaux d'annonces gratuits... »*となる。)読解後の作業としては、何らかの広告文をエルノーのように分析してみる。

テキスト：読解に先立ち、まず、コソボ紛争、Milosevicについて簡単に言及する。次に、Anouilhとは誰かを確認する。語彙としてはfichusを説明する。また、この断章を取り上げたのは、テキストの構成を読み取る練習のためである。そこで第二、第三パラグラフではそれぞれ何がテーマとなっているか、何と何が対置されているのかを図式化するなどして把握するよう指示する。すなわちここでは人々のコソボ人収容者への同情、その一方で、恒常的に存在する国内の失業者への無関心が指摘されている。前者は「突然で集団的でミロセヴィッチというたった一つの原因に帰せられる」悲劇であり、「想像の領域に強いショックを与える」。そしてその犠牲者たちには、何の責任も手立てもないと見なされる。だが、不法滞在者、住所不定の浮浪者、失業者たちの不幸は、「緩慢で孤立し、複数の原因を持っていて、見世物にならない」。その犠牲者たちにも何とかしようがあるのではないかと見なされる。このように、コソボ紛争によるコソボ人収容者と、フランスの多くの失業者たちの存在を巡る人々の反応が、それぞれ対置されている。最後の「こちらの不幸は、救援物資とは別のものを要求する」という一文は、作者の見解であり、失業問題には一時的なものではなく根本的な対策が必要であることが主張されている。尚、冒頭の「雪が降る中 [...] 一人の男が食べ物要求していた」という文章は、後半の失業者などへの言及の予告と読むことができる。

テキスト読解後に、人道支援が必要な国際的な事件が起こった際、この作家のような見方をしたことがあるかどうかなどについて話し合う。可能であれば、準備をさせた上で次週にフランス語で行う。

テキスト：予習の前に、どの単語が俗語であるのかを示しておく。フランス語にある程度慣れるまでは、どの分類に属する語であるのかを予想した上で辞書を引くことができないからである。

読解後に、このテキストをモデルとして、フランス語の日記を書かせる。つまりテーマの宣言、観察、分析という構成にし、例えば日本の社会問題の一つについて書くように指示する。

当初は、内部の日記、あるいは様々な要素が混ざった一般的な現代日記も扱う予定であった。しかし、専門の異なる学習者たちを飽きさせることのないよう教材を多様化する必要があった。もし半年間の授業15回分を全て日記の読解に充てれば、日本の日記も視野においた授業を行うことができたはずである。日本語のテキストも同時に扱うことで、「母国語の読書経験」がフランス語テキストの読解に具体的に生かされるような授業を提案することができたことと思う¹⁴。いずれにせよ、もう少し多くの時間を割き、学習者の関心やレベルに従って断章を選択し、それぞれに適した読解の目的を指示すれば、日記の講読によって一定の成果が得られると考える。

参考文献

- CICUREL, F. (1991), *Lectures interactives en langue étrangère*, Paris : Hachette.
- DIDIER, B. (1976), *Le Journal intime*, Paris : Presses universitaires de France.
- ECO, U. (1985), « Le Lecteur Modèle », in *Lector in fabula ou la Coopération interprétative dans les textes narratifs*, traduit de *Lector in fabula* (1979) par Myriem Bouzaher. Paris : Grasset, pp.64-86.
- ERNAUX, A. (1993), *Journal du dehors*, Paris : Gallimard.
- ERNAUX, A. (2000) *La vie extérieure*, Paris : Gallimard.
- GENETTE, G. (1981). « Le Journal, l'anti-journal », *Poétique*, 47, pp. 315-322 .
- GRUCA, I. (1993), *Les textes littéraires dans l'enseignement du français langue étrangère : Étude de didactique comparée*. Thèse de Doctorat, Université de Grenoble.
- LEJEUNE, Ph. (1975), *Le pacte autobiographique*, Paris : Seuil.
- MOIRAND, S. (1979), *Situations d'écrit. Compréhension-production en langue étrangère*, Paris : Clé International .
- 中村啓祐，長谷川富子（1995），「読む力をつけるために」，『フランス語をどの

¹⁴ この翌年に、同じ大学の学部の2年生（12名）を対象に、エルノーだけでなく、他のフランスの作家と日本の作家も含めた日記の授業を6回ほど行った。やはり思う通りの時間を割くことができなかったが、少なくとも日記テキストに関心をもって取り組んでもらうことができたと思う。

ように教えるか』, 東京 : 駿河台出版社, pp.122-146.

RAOUL, V. (1999), *Le journal fictif dans le roman français* / traduit de *The French fictional journal : fictional narcissism, narcissistic fiction* (1980) par Anne Scott, Paris : Presses universitaires de France.

ROBERT, P.-E. (2004), « Les écrits personnels dans l'enseignement du français langue étrangère : les journaux d'écrivains contemporains », *Textes littéraires et enseignement du français, Dialogues et cultures*, 49, pp. 177-183.

ROUSSET, J. (1986), *Le Lecteur intime : de Balzac au journal*. Paris : José Corti.

(埼玉大学)